



中村俊定文庫
文庫 18
468





附録

列國紀聞



山	洞	也	楠	ぬ	茶	た	茶	よ	反	も	も	ゆ	蝶
杯	塞	や	さ	く	く	此	を	と	海	ふ	く	李	完
少	く	く	よ	茶	の	押	給	や	人	の	め	子	鳳
追	ふ	く	く	舟	入	る	ぬ	茶	ふ	一	瘡	素	流
叢	入	や	郊	く	子	を	摘	智	ひ	文	下		
年	ら	く	か	く	く	く	く	の	涼	く	の		

伊豆府

あゝもし暑きことうらむかいつ
ゆゑもくもふ欲ありけしきん
小蘇ひくおちもかすくも浪广の浦
あゝ桑名のをるるかゝり来れ風
山さやあゝももあゝかきし
うへへきと精もあゝ雉の声
子と女の袂くおのきり那
連翹や庭をうらむもあゝのきり

吾東
只言
秋鳥
麥雨
近江
後川
智丸
魯江
浪羊
了鷗

さゝもれやき柄の格あゝも
七子や親の梅ふかゝりあゝ
旃檀くぬりくの月おゝも
ねむもあゝもあゝもあゝも
籠ハやあゝもあゝもあゝも
あゝもあゝもあゝもあゝも
一僕の肩よおゝもあゝも
ねむもあゝもあゝもあゝも

寸馬
旧國
堺
吳一
安藝
風律
豊後
蘭里
備後
古声
伊豫
吸江
播
山李坊

最入も完く〜あ〜念佛系
あ〜生る用ら〜れ〜友の月
牛の鉦〜の〜候や〜
わ〜舟や〜入〜
堂〜の〜
堀堀や〜
明〜
ち〜

布舟
丹後 東陌
馬吹
百尾
竹圃
但馬 木卯
伊賀 素由
桐雨

ま〜
あ〜
逢〜
山吹や垣の枝〜
急目や〜
さ〜
か〜
あ〜

伊勢 入楚
榎良
坡仄
隨雨
尾陽 二日坊
也者
澁臺
木兔

春の光をば 霞のうらやまの夜に
 終つたや 庭へ 枝がいつ
 山崎のふらふら 出たをきく
 立ちまわりの 樂中も 清水系
 きれい 飛杖のふらふら や 郭公
 うらやまの 目も 夢や 夢の
 けさに入ると 夢の中 夢の

紀来
 春光
 鳥秦
 ハ 龜
 蝶羅 鳴阿
 見風 加吹
 梨一 滋前
 松因

あつ葉より 仮名のさしや 夢不
 智の葉よ 昔のさしや 夢不
 名月や 原のさしや 夢不
 川喜や 一艘のさしや 夢不
 ニおのの 夢のさしや 夢不
 眞ふら 夢のさしや 夢不
 渡江の 夢のさしや 夢不
 阿什の 夢のさしや 夢不

洞波 中
 玉弁 中
 黒花
 不及
 周竹 遠江
 東莪
 渡江
 阿什

藤や島もまゝに婆いひり

三河 杜鳥

や中よ三つと月桂芭蕉うふ

相模 得魚

鳴らうの需いさういふ

石 髪

白妙いかにむや富士の冠さう

祇 村

かこらよぬらう月あけ初すき

東 也

志くぬいや藤のさう人もさう

封 姑

名月や虫を隔る人のみ

亡人 麥由

梅うら下とるむこ春のを

字付 巨石

松うらや又世よ出る豆腐うら

伊豆 柳 儿

小糸女の夜いあうまぬい

水戸 三日坊

ひらう寐の敷とらぬらう歌い

甲府 琴 峯

抱籠と寐と夜や爰もそま

甲南郡 吟 舟

七夕や言はういふもこのぬら

鯉 丈

踏うけう牛も糸のつと枝ゆい

南 舟

葉さういふを起すやなま

甲十島 三 花

海うら物もさういふは葉うら

甲十島 布 水

東都

茶とや牛乳滑出寸蝶ひとつ

門 窓

面ふく瓜のころけり流川

卷 阿

卵酒聖人る売乃きむさし

仙 友

の阿くも西へいさく十夜うぬ

陸 祖

漆木みらに鯉節多へよ梅の意

楚 龍

月さよむい夜を何つめて物懐く

鳳 宿

鷹く居く果り市えのおもくぬ

夜 兔

こそねくく袖こそその音を守夜系

夜 梧

くくくは海へ入くや袖くつ不

黙 我

まよくくくくくくくくくくくく

阿 人

是ふふくくくくくくくくくくく

人 左

戸さくくくくくくくくくくくく

雷 堂

くく船の水逆さほふ百術くぬ

吐 月

いき宵や闇とさくくくくくく

阿 音

茸くくくく守り鍋を提めたり

連 丈

指つるや舟小寐ふぬ人の顔 魚
 暮らふとぬるひささぬ秋の蝶 山
 ぬる蝶くぼくくくくくくくく 文
 乙やくくくくくの中はくくくく 六
 くまふぬのふくくくくくくく 蓼
 太

女列

かやそくの水ふもさくくくく 千代尼
 後ものハかふくくくくくくく 諸九

加

洛

精くくくくくくくくくくく 可直
 出敷中や衣くくくくくく 蘭室
 ぬまやくくくの中をくくく 奇川
 くくくくくくくくくくくく 深雪
 くくくくくくくくくくくく いと
 隣もくくくくくくくくくく 阿ま
 ぬまやくくくくくくくく 阿まの
 乙まゆ一車くくくくく 糸
 目

今

東

三

豆

い

阿

阿

豆

川きまふ井をくちまふり

豆吉田

礼伴

秋河

甲南部

須广

押

和菊

室梅

茂

駿河

吉原

冬

いよ

夜

い

涼

きん

白

天橋

花夕

梅

と

ゆ

沼津

あ

水

庵本

志賀

ま

府中

須广

さ

う

う

志

笑

喜

山系をわわらぬところへ夜おここの

淋しきおのころのこころを
沼津 白峯

目のまぶさのこころを
楚雲

島系も更くまぶさの終籠り
弄沙

まぶさも砂よ更りちりり
旅人

よそおのこころを
電魚

滑りすべの下ゆく清水系
五竹

す掃や思のこころを
小十

一とつ 檜橋のこころを
春瓜

志し遠れをすべのこころを
其山

明神の愛も出あるこころを
大雅

こころの縁おこころを
雨竹

咲くこころを
馬六

水よ河の影のこころを
雪濤

枝折戸を細くするこころを
荻原

伊豆

美濃川

入相子移れ自乃多く何れ也

長尺 斯文

ゆゑつ下も階もやふもきん

香爰 楚竹

礎もくもふくもゆるもらも

口也 阿丘

さきもたやに舞のつも板ひさし

柳候 杜兮

ゆゑもらやかしく一里塚

吉原 菊時

人の事ぬ時とく啼か入こも

和雲

山茶花やぬも枝おくすも

巴雪

涙ふもあもぬる方のすもれ也

三遅

院もけく来もふやきく梅茶

茶六

焚柴のもも枝りもくもれ也

雪朝

さきもたやに舞のつも板ひさし

二毛

ふもや女子の足もはぬ一里

雪五

呼もあも人もあもれもすもり

木客

何も時ハもよおもぬも

十笑

ゆゑもらやかしく一里塚

雁奴

瓜也しくもくも入も清もあも

冬羅

子稻のまやねるふのほろろきし 馬麥
 母うくく一さへせん急ひ寸博 知秋
 咲りく杖いふやいー葉のま 素絃
 重保一の盤や小袖をるふく 樵花
 於のふれ用庭のまハ嵐うぬ 雪貞
 妻いまま水とんく居る煙うふ 加島 竹卧
下田の夜笛 山雀の枝の葉をくくるさうり 夜笛
 拾いれり子も母のおまの爪 大宮 賀齋

せ業を繕く押おささむさし 井花
 むし干や又ぬるる袂 雁砂
 杉風と第海しーくせいのか 干楼
 夕のるの老をまいぬ 瓢うぬ 和夕
 弱う保やいろはの後をぬくまじ 千浦
 妻とのほろろらうらよ小あまぬ 梅五
 寐せし子ふりの傳くぬ茶摘らふ 定師 古音
 るこのまもやあまのこまも 北山 等雨

根方 峯洲

楢よまこころぬ女ひらりきよの月 扇下

風も本こころを感ゆるをすまき 十路

木よ何そふる入つちりんを月 梢魚

ぬらりや〜月ふあをぬきぬら 菊羽

その角ハ登り替入る度のか 暮江

ぬらぬや若〜り近す楳枝先 乙壽

葉や露〜〜〜もの影 茶夕

根方

扇下

十路

梢魚

菊羽

暮江

乙壽

茶夕

胡ふ不や奢の〜もる〜こ盛 斤落

昔の袖〜〜〜も〜〜〜泉中

作ら〜〜〜や〜〜〜追ま〜 柳市

弱ふぬや昔の〜〜〜も〜〜〜打水

梅〜〜や氷〜〜〜ぬぬの〜も ち〜

松〜〜の〜〜〜拾り〜〜〜 如柳

自ら〜〜あ〜〜〜一細代守 實五

いろ〜〜は〜〜〜〜〜梅児

根方

扇下

十路

梢魚

菊羽

暮江

乙壽

茶夕

斤落

泉中

柳市

打水

ち〜

如柳

實五

梅児

色蓮忌やりきい茶ら茶の飯俵子

曲金

風人

縮つまや仲ゆく舟の何らも

東何

すーさのうこいけさの秋

小麻

電齋

宮ふむいふつふい丸木櫓

起雲

いふ妻はまつ方いせーや中

水玉

秋ふらやそのまの田より

和水

指つまやういふおのり

陽元

おのりおのりいふおのり

加田

新し〜廣の名呼んけさの秋

金五

子あつむいふいふいふいふ

廣原

卷而

あつむいふいふいふいふ

梅雅

押つむいふいふいふいふ

李所

あつむいふいふいふいふ

出葎

あつむいふいふいふいふ

掩身

あつむいふいふいふいふ

不曲

府城

水仙や青き中より花二つ見

盤古

青く葉と黄菊乃中を物々見

耳得

意もぬ水もくこ岩つ

盈行

守りし板石へ出さる物く礼

奇峯

咲く風も通さぬほく人

梅妻

傘の女く重く鼻目る

一茶

鶯鶯乃端くつりり物氷

桃壺

定ふまふふふふふふの月

扶老

さきも物や阿あみ寸小水物

雅堂

芭蕉くハ置寸ひく葉枯破き

兀子

更くく霜へもくぬやあ月

兔夕

秋夜の雪一株やふき

杉柯

茶処茶や雲く里らぬ物白

都雁

呵れくさくハ法室く反乃月

蓼旦

蟬くく山やくくくくくく

鐘山

この巻も水楽とては秋の
 河ら〜物に〜初さく
 厚まら〜宮と〜やある
 水心や葉よ〜た〜
 所蔵や子よ〜水の
 能製〜の〜
 琴よ〜瓜よ〜
 引沙よ〜ら〜も〜

子来
 之伸
 一之
 這来
 素好
 大仙
 備舟
 梧友

色つぬめ〜ら〜は極什
 杖もよ〜お〜ら〜葉のを
 々〜ら〜も〜を〜大〜物〜
 引水のも〜お〜や〜柳陰
 是〜ら〜あ〜の〜く〜杜〜
 むつ〜や〜婿〜夫〜干〜鼻〜
 一〜れ〜落〜葉〜を〜
 柳も〜ら〜い〜ぬ〜階〜の〜

六賈
 居逸
 琴馬
 素調
 菊友
 我年
 梧泉
 金鳧

六花菴初會

何〜〜〜七子ふ〜〜〜

乙見

梅も卯寐の庵姑小窓

雪五

柳〜〜〜ひよ雀の鶯〜〜〜

二毛

首〜〜〜るれ冷〜〜〜た〜〜〜ぬれ

木容

〜〜〜〜のむ〜〜〜る月ふ〜〜〜ぬ〜〜〜

巴雪

宵直もふ〜〜〜る〜〜〜のか〜〜〜

雪貞

編あ〜〜〜くぬ葉〜〜〜の飲仲宵

茶六

あ〜〜〜る〜〜〜る〜〜〜る此多城

官鼠

ゆ〜〜〜水の悠〜〜〜れ〜〜〜る〜〜〜る筋ま

提國

子〜〜〜等〜〜〜る〜〜〜る〜〜〜る

杜兮

入聲姑顔押ぬ〜〜〜る〜〜〜る

雁奴

歯〜〜〜く〜〜〜る〜〜〜る〜〜〜る

雪朝

御新堂の秋〜〜〜る〜〜〜る〜〜〜る

和雪

掃の〜〜〜る〜〜〜る〜〜〜る

冬羅

伊豆附

阿の鷹の負も儼々儼々へへ
 そき裁所の是り遠くへへ
 以て保寸をより終の後むき
 こゝろ報きも二日あり
 荷ふの呼子も猿よきつら面
 くくく常共むらり中着
 何ともいへぬ伯父のそと軒
 房の如先へ古市の文
 樵花
 阿丘
 三遅
 去留
 五
 雪
 貞
 児

涯ふく緒いもへらて塗木履
 のわくわく城の隅く
 東のくくく榎く啼くくり
 何の報ひく下戸く梅担
 運俗のくくく入く世もむくわ
 陸も襖もきき道の説
 さほく故やうくく月の夜さ
 節のさうりれくくくぬも
 客
 毛
 丘
 國
 鼠
 六
 弱
 奴

夕
 織るるふひの織を又ハ
 嵐や漏桶やふ内徳も
 夕つ〜極〜舟のおく〜ハ
 夜笛
 沙汰ふ〜よま〜と〜
 分
 時は羽風の蝶乃こ〜
 花

六月菴月並

菴原

乙見

水も高きまき茶袋の河〜ま〜
 合飲も吹ち了郵郎の指
 梅雅
 折〜〜尾の笑〜〜も〜
 梅雅
 あ〜〜も〜ぬ世よ〜成〜
 掩耳
 市のをほの〜ふ月〜
 志賀
 杉木煙乃舟よま〜
 執草

葉ウも花もさかしくしと丹子ウも
袴ウのちうしとさうなれ
子ウもさうなれとさうなれ
りウもかきとさうなれ
裸ウ子も乳もさうなれ
兜ウのちうしとさうなれ
押ウ小娘もさうなれ
連ウもさうなれの袖ウも

雅 来 而 児 耳 雅 賀

地ウもさかしくしと戸ウ棚ウのさうなれ
とさうなれとさうなれ
おウ志ウのちうしとさうなれ
とさうなれとさうなれ
とさうなれとさうなれ
とさうなれとさうなれ
とさうなれとさうなれ
牡丹ウのちうしとさうなれ

雅 而 来 賀 而 児 耳 来

赤くく居きハ杖つく日も何い
 言尾く成と娘おましん
 蓮生をり秋ゆきよはの世し
 浦ハ鯨乃小判ゆめあり
 立時の後よ人よまらるる
 え然、ゆゆ又まらるる
 三月のころ何らふらん
 化ぬ氣も笑ハ笑ハる

耳 来 賀 児 而 雅 児 耳

新蕎麦の後とさくは好まれ
 儂く持せぬ入お
 ところ一里の山中
 河小利や温泉も涌く也
 いらんふくたの世の
 やよむしきり塘もかすも

耳 而 雅 賀 児

席上

予仙六首の
冠辭をくわん

可々息もつくくく田子丸
 可々山清水もむふんせん
 荷葉よつまく鮎もくぬく
 月ちあゝぬをむむく氷室山
 色もくく上もくやつらふ
 けり降も客を何もくはすしよ

這来
 梅雅
 卷而
 掩耳
 志賀
 乙児

夕暮坊會

府城

梧泉

竹ぬ人けり川松へもるまき
 園扇も空も月の宵く
 奇きま雀踊へ福もぬち
 控も阿もくと西瓜四五般
 浦こく丸風中くまもそげく
 さしきくまき茶をらあし

乙児
 奇峯
 金鳧
 盤古
 居逸

髪ふん〜九手唐画よやつさ果
 鼻も痛酒〜あひまきわ
 ちく楽の楽をへ仇ふ下結のき
 他力ふち智の師首蓮華坐
 もやくやの世世え弘もとりて
 ニツ子れ海海の嘆りま〜きよ
 清る月如影も歩芽う宿ぬ
 かなぬあまの鬼やくもゆる

兎 泉 古 是 峯 逸 泉 兎

素生もせよ志〜あぢ〜おち〜也
 皆招腋の減やく〜ふ
 六回ま〜つ〜あ〜^風も入連り
 志契の何〜りハ土離紙能
 糸ゆ〜め如羽織〜符も〜あ〜⁺
 物そふの用基す〜
 お夜詣〜を〜せま〜
 水倉の能も〜ふ〜
 泉 兎 峯 逸 是 古 逸 峯

泉 兎 峯 逸 是 古 逸 峯

一志きりえぬ悪風も吹く
むしりかきりを入道の君
冬もぬ葉も風も枯れまき
家鴨の連り路も細く
義もさへくさへくさへく
勅渡さへく流るる女
照い中の隈ふき月の溪
於此仕業よかきり神垣

鳧 古 泉 逸 古 鳧 峯 児

さへくさへくさへくさへく
何れへお出と聖地修刻
寺様よ子十目掛の悪り
吹る風も流るる系
冬もぬ葉の香先いり
春も吉もも行くかきり

逸 泉 児 古 鳧 峯

山崎

山崎

三

藤園兩唱

羽の〜ぬ坊於も尺へて秋の雪

かく〜聲さの翠蒼の産志と

混色和琴うつ〜男とら花りみ

疾〜呼〜舟とま〜せ

ろれ限〜置寸嵐の吹〜

秋無の〜柄さもあ〜ん

乙児

金鳧

児

鳧

利^ッよま〜親仁う懺悔あ〜り

か〜こ子漏の桶もあ〜つ

真よ白ひ〜を袖の〜河〜

あ〜い信まは浪馬匂あ

漆ま〜か〜を〜お〜

片昔〜〜移厚河〜

入月の雪〜〜川流〜

尺すや月新のら魚〜

児

鳧

児

鳧

児

鳧

児

鳧

まのこころし止る角力をめせよ
まづり備えぬと又相隣
いそぐ心均執よまのまをま
宵く寝まよとぞいほし
相活あへの腋く面くまはる
かきのおくもくくくま
よの中と入せぬ小判のゆるあ
喧嘩の疾れぞくくくく

兒 鳧 兒 鳧 兒 鳧 兒

諸あぬくまも葵のまつり
霞の庵くものも黄きん羅針
くまもまのつらふら後おく
二度の返まよ肝くくま
荒島乃ちくく風の吹く
石切出す霧乃まの
神まの何まらよかま
普代がくられ腕をくく

兒 鳧 兒 鳧 兒 鳧 兒

二の膳仕迄くいふ川引落し
 舟漢もとり舟の極楽
 夕陽をまむむむむむむむ
 築りゆく河の庭の木映
 本守と舟遊らるるこころの
 程かかゝるのちかかゝる
 身 見 身

跋

六の夏先生ゆゑに金一と云ふ
 東都に旅泊よきこのころ帰途
 又丸折の腰を押し伊豆に
 もかかゝる薬師のやまに
 そのまゝに舟に乗りおのり
 まゝに舟に乗りおのりの袂に

いし生か松上りてく紀の
稿とて一冊の何れに并きとて是れ
増或は及古のゆゑにさくら
所録ハ僕ハあつて一冊ハ西浦
田の勢の掎拮にそのゆゑに
かゝる梓上のふかから梅巴人
あつて

書林 花洛野田治兵衛

